







セリが始まる前に、腹囲、胸囲、栄養度などを農協の担当者がチェックする。合格率は5割前後と厳しいため、生産者にとっては緊張の一瞬だ



合格した子牛には「マニュアル子牛」と書かれた黄色の額章がつけられる

都城農協では、肋張りがよくフレームのしっかりした商品性の高い粗飼料多給型の子牛づくりを目的に、平成14年から“牛づくりは土づくり・草づくり・腹づくり”をキャッチフレーズに「粗飼料多給運動」を展開している。

この運動のスタート当初の会員農家数は300人だったが、現在では500人近くが会員登録しており、マニュアル子牛参加牛の出荷頭数も、平成14年は年間880頭だったものが、平成18年は1900頭を超えるなど、年々増加傾

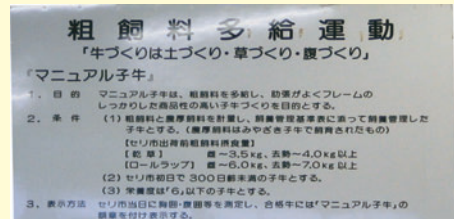
向にある。

会員は、管理基準に示されている日齢ステージに応じた粗飼料・濃厚飼料の給与量の報告書を都城農協に提出するなど、細かい飼養管理を行い、「マニュアル子牛参加牛」として出荷するが、セリ当日の審査（胸囲・腹囲・栄養度などの測定）の合格率は40～50%と厳しい。それだけ、買い手側である肥育農家にとって「マニュアル子牛」の信頼度は高く、平均価格も4～5万円高く取り引きされる。



セリ場への入場。都城農協では体高をそろえ、食い込みのいい子牛を肥育農家へ供給するため、早期適正出荷を推奨している。出荷目標は雌牛が300日、去勢牛が285日となっている

マニュアル子牛に高値がついた瞬間。黄色い額章はセリ場の遠くからもよく目立つ。合格率は40～50%と厳しいが、参加牛は合否にかかわらずセリ市名簿に「マニュアル参加牛」と表示されるため、参加牛の出荷頭数は年々増えている



セリ場の壁に張られている「粗飼料多給運動」のプレート







開放感のある明るい久留さんの牛舎。すべて自己資金で建築した



エサをたくさん給与しなければならぬ妊娠牛には赤い耳標、食い込みの悪い牛には緑の耳標をつけて、エサの給与量を調整している

「マニュアル子牛」の生産農家の1人である久留雅博さんは、都城市で繁殖牛78頭規模の肉用牛繁殖経営を行っている。大学卒業後に都城農協に就職し、実家の経営（肉用牛繁殖経営と水稲の複合経営）を手伝い、平成7年に父から経営移譲を受け、平成10年から専業となった。

久留さんは、農協勤務時代に「粗飼料多給運動」のプロジェクトメンバーに配属され、「粗飼料多給型子牛育成管理基準」の作成に参画したこともあり、自身の経営でも、粗飼料の食い込みが悪いなど特段の理由がない限り、粗飼料を多給して、すべて「マニュアル子牛」参加牛として出荷するように心がけている。

現在は自己所有地と借地を合わせ、約9.2haの採草地でイタリアンライグラスやエン麦、トウモロコシの作付けを行っているほか、地元産の稲ワラも積極的に活用している。

トラクターやコーンハーベスター、ショベルローダーなど、自給飼料用の機械を数台自家保有しているが、平成11年に粗飼料生産・稲の刈り取りなどを地元の畜産農家・園芸農家7戸と共同で行う「横市機械利用組合」を設立し、大型トラクター、ロールベラー、ロールラッピングマシンなどを共同所有して、自給飼料の確保に努めている。



(写真上) 横市機械利用組合で生産したイタリアンライグラスとエン麦のロールベールサイレージ (写真下) トウモロコシサイレージは給与しやすいように、コンテナに入れて準備する



(写真上) 子牛用の飼料を保管しているビニールハウス。チモシーやルーサンなどの乾草のほか、稲ワラも給与している (写真下) 地元産稲ワラの保管倉庫







(写真上) 牛の体調を整えるために、  
 飲用電気温水器を設置して、一定の温  
 度の温水を与えている  
 (写真左) パドックだった敷地に増設  
 した牛舎。これも自己資金で建築した



神社から牛舎  
 の柱に張って  
 ある牛の親子  
 の絵。神社か  
 らもらった縁  
 起物である



久留さん(右)と都城農協畜産部の土屋博文さん(左)。  
 ともに「マニュアル子牛」を支える大きな力となっている

牛舎は廃材を利用した低コスト牛舎(1㎡  
 当たりの牛舎建築費約5500円)で、その後も  
 規模拡大に伴い増・改築を行っているが、す  
 べて自己資金。たい肥舎などの施設や自家所  
 有の機械も自己資金で導入しており、非常に  
 健全な経営状況である。

「最初は肥育経営がやりたくて、父から経  
 営を引き継いだ。一時は肥育牛も飼っていた  
 が、いまは子牛の相場が高いからね。そのう  
 ち相場が落ち着いたらまた肥育牛も導入した  
 い」(久留さん)。農協勤務時代の貯蓄等を繁  
 殖モト牛導入資金に当て、相場の安いときに  
 まとめてモト牛を導入するなど、常に相場を  
 にらみながら増頭を行っている。この堅実な  
 久留さんの人柄が経営にも反映されている。

「マニュアル子牛」誕生の裏には、このよ  
 うに農協職員や生産者の人たちのたゆみない  
 努力がある。肥育農家が飼いやすい高付加価  
 値のブランド子牛として、また、現在国を挙  
 げて進められている自給飼料増産運動に拍車  
 をかけるためにも、1頭でも多くの「マニ  
 ュアル子牛」が生産され、この取り組みがさら  
 に広がっていくことが期待される。



牛舎は住宅地にあるため、牛  
 舎の周りには色とりどりの花  
 を植えて環境美化にも心がけ  
 ている



牛舎の前にある牛魂碑。石  
 像を扱う久留さんの知り合  
 いがつくってくれた